

六条康子。若林光。葵。看護婦。

深夜の病院の一室。下手に大きな窓。カーテンがかけてある。奥にベッド。葵が寝ている。上手にドア。

光

(旅行鞆かばんを下げ、レインコートを着たまま、看護婦に案内されて入って来る。美貌の青年。声をひそめて) よく眠っていますね。

看護婦

ええ、よくお寝っていらっしゃいます。

光

ふつうの声で話しても目をさましませんか。

光

ええ、お薬が利いてますから、一寸ちよつとやすと、大きな音を立てたって。

光

(葵の寝顔をじっと見下ろして) 静かな寝顔だ。

光

今は静かな寝顔をしていらっしゃいます。

光

今は？

ええ、それが真夜中になりますと……。

苦しむ？

ひどいお苦しみなんです。

光 看護婦

ふうむ。(ト枕もとに下げられたカルテを読む)

若林葵。十二日午後九時入院か。……

ここに僕の寐やすむところはあるでしょうか。

(上手奥をさして) 次の間にどうぞ。

夜具蒲団かどんはありますね。

ございます。今おやすみになりますか。

光 看護婦

いや、もうすこしこうしていきましょう。(ト椅子にかけて、煙草に火をつける)……何しろ旅先へ発病のしらせでしょう。大したことはないが、入院させた、なんて、入院すれば、大したことじゃありませんか。ねえ？

葵

奥さまはよくこうした発作をお起しになるんでございますね。

光 看護婦

はじめてというわけじゃありません。しかし大事な商用の旅だし、やっと今朝仕事をすませて、かけつけて来たんだが、旅先だと一層心配なものですよ。

さようでございましょうとも。

(卓上電話かるくチリチリと鳴る)

(受話器を耳にあててみて) 何もきこえない。

光 看護婦

看 光 看 光 看

よくこの時間になると、そんな音が。故障かもしれないな。だが、病人の部屋にどうして電話が要るんでしょう。ここの病院では各室に電話が備えつけてございます。病人に何の用があるんです。

患者さんのほうで御用があるんです。看護婦の人手が足りませんから、急用の場合は内線の電話で呼んでいただきます。それから、本なんかをお取寄せになりたいときは、御自分で本屋をお呼びになれます。これは外線のです。外線の取次は、交換手が三代で廿四時間つとめております。又、絶対安静の患者さんなどには、電話はお取次ぎしないことになっております。

家内は絶対安静じゃあないんですか。

さあ、それがお寐^{やす}みになってから、よく運動をなさるんです。手をあげたり、唸^{うな}ったり、体を左右にうごかしたりなさるんです。そういうわけですから、絶対安静とは申しかねます。

(怒って) この病院では……。

この病院では患者さんの夢の中までは責任をお持ちいたしません。

(聞——。看護婦そわそわしだす)

何をそわそわしているんです。

光 看 光

看 光 看

別にあなたに魅力を感じたからじゃございません。

(仕方なしに笑って) ますますへんな病院だ。

そりゃああなたは好男子ですわ。光源氏みたいに。でもここの病院では、看護婦の訓練がとてきびしいんです。あたしたちはみんな精神分析療法を受けますの。そうして、性的コンプレックスをみんな解放してしまふんです。(手をひろげて) みいんな！要求があるときはいつでも充たせるようになっておりますし、その点、院長も若い先生方も心得たものです。必要なときは処方のお薬を下さいますの、セックスというお薬を。お互い同士に、何のごたごたもございませんわ。

(感心して) へえ……。

ですから奥さまのいろんな夢も、みんな性的コンプレックスから来ていることが、わざわざ分析してみなかつたって、わたくし共にはちゃんとわかっております。何の心配もございせんわ。分析して、そうして解放すればよろしいんです。その手がかりに、こうして睡眠療法をしておりますの。

家内は、それじゃあ、睡眠療法に……。

はあ。(相不変そわそわしながら) 私、ですから、患者さんにも、失礼でございますが、

患者さんの御家族の方や、御見舞客にも、まるきり理解というものが持てません。そうじゃございません？ 御一人のこらずりビドオの亡霊なんです。そうして毎晩お見舞に

看 光

看 光

石 光

石 光

石 光

おいでになるへんなお客様も……。

毎晩？　ここへ？　見舞に？

あら、言っちゃったわ。入院なさってから、毎晩続けていらっしゃるんです。それも、この時間にならなくちゃ体が空かないからって、こんな晩くに。あたしって、固く口止めされてたんですけど、つい。

男ですか、そいつは。

御安心なさいまし、中年の御婦人ですわ、とてもきれいな。……もうそろそろ見えるころですわ。その方がいらっしゃると、私いつもそれをしおに、退って寐ませていただきますの。なんだかお傍にいと、へんに気が滅入って来るもんですから。

どんな女です。

そりゃあ豪華な奥様ですわ。大ブウルジョアっていう感じの。性的抑圧って、かえってブウルジョアの御家庭ほど烈しいんですのね。……とにかくそろそろ見えるころですわ。(下手へ歩み、カーテンをあける) ……ごらんないまし。灯のついている家はもうほとんどありません。街燈の列がくっきり二筋に並んで見えるだけですわ。今は愛の時刻ですわね。愛し合って、戦い合って、憎み合って。昼間の戦争がすむと、夜の戦争がはじまります。もっと血みどろな、もっと我を忘れる戦いですわ。開戦を告げ知らせる夜の喇叭が鳴りひびく。女は血を流し、死に、また何度も生きかえる。そこではいつ

も、生きる前に、一度死ななければならぬんです。戦う男も女も、その武器の上に黒い喪章を飾っています。かれらの旗はどれも真白なんです。でもその旗は、ふみにじられ、皺くちやにされ、ときには血に染まります。鼓手が太鼓を打ち鳴らしています。心臓の太鼓を。名誉と汚辱の太鼓を。死んでゆく人たちは、何てやさしい息づかいをするんでしょう。何てあの人たちは、自分の傷を、口をあけた致命傷を、誇らしげに見せびらかして死んで行くんでしょう。ある男は泥の中顔に伏せて、死んで行きます。恥があの人たちの勲章なんです。ごらんないまし。灯が見えないのも当然ですわ。ずっと向うまで立ち並んでいるのは、あれは家じゃなくて、お墓ばかりなんですわ。それも決して月の光が、御影石のおもてをきらきら光らせたりすることのない、汚れた、すっかり朽ちかかったお墓なんです。

……あれに比べると、私たちは天使なんですわ。私たちは愛の世界、愛の時刻には超然としています。私たちは時たまベッドの中で化学変化を起すだけなんです。世界にはこんな病院が幾つあっても足りませんわ。院長さんもいつもそう仰言ってますわ。

……あら、来た。来た。いつものあの自動車ですわ。銀色の大型車。飛ぶようにやって来て、病院の前でピタリと止りますの。ごらんないまし。(光、窓に近寄る) 今、陸橋の上を走っているでしょう。いつもあっちからまいりますの。そうして、そら、あそこ

光

六条康子

……光さん、しばらくね。

あなただったんですか、真夜中の見舞客というのは。

誰がそんなことを……って？

……。

あの看護婦でしょう。お喋りね。……あたくし別に見舞に来るわけじゃございません。あなたが御旅行中だったうかがったから、代りに毎晩、花束を届けに上るだけなのよ。

花束を？

(手袋の手をひろげて) 何も持っていないでしょう。花束って、見えない花束なの。苦痛の花束なのよ、これは。(ト枕もとに活けるふりをなし) こうして枕もとに花束を挿すと、苔が灰いろの花をひらくの。葉っぱの下には、おそろしい棘がどっさり生えて

六光

六光六光

六光六光

六光六光

六光六光

六光六光

いるの。花からいやな匂いが出るの。匂いが部屋じゅうにひろがるの。そうすると、ごらんさない、御病人の顔が、今までの平和を失って、頬がわなないて、恐怖でいっぱいになりますの。(手袋の手を顔の上にかざす) 顔が今、おそろしいものに変っているのを、葵さんは夢に見ているんだわ。鏡をのぞいて、今まで美しいと思っていた自分の顔が、皺だらけになってしまった夢を。そうして、あたくしがこの手をやさしく咽喉にふれると、(ト病人の咽喉に手をふれる) 葵さんは首くくりの夢を見るんだわ。顔は充血し、息は詰まり、手足は苦しさにばたばたして……。

(あわてて康子の手をはらいのけ) あなたは葵に何をなさるんです。

(立ちのいて、遠くから、やさしく) 苦しめるつもりなのよ。

失礼ですが、葵は僕の家内です。余計な手出しはさせません。おかえりになって下さい。

(ますますやさしく) かえりません。

あなたは……。

(近寄って、やさしく光の手をつかんで) 今夜来たのは、あなたに会うためだったの。

(手をふり切って) 氷のような手だ。

当り前だわ、血がかよっていないんですもの。

その手袋は……。

この手袋がおきらいだったら、脱ぎますわ。お易い御用よ。(ト歩きながら、すずろに手袋をぬぎ、電話のそばへ行く)……あたくしはとにかく用があるの、大事な、是非とも果さなければならぬ用が。それだから、こんな夜中に、御苦労様に、こんなにとびまわっているんだわ。夜中……。 (腕時計を見て) もう一時すぎね。夜は昼間とちがって、体が自由なの。人間も、物質も、みんな眠っているんですもの。この壁も、簾たすきも、窓硝子ガラシも、ドアも、みんな眠っているの。眠っていて、みんな隙間だらけなの。そのあいだをとるのは造作もないのよ。壁をとおるときは、壁にも気づかれずに。夜って何だと思ってる？ 夜というのは、みんなが仲好くなる時なのよ。昼間は日向と影が戦っている。ところが、夜になると、家の中の夜と、家の外の夜とは手を握っているの。それはおんなじものなの。夜の空気は共謀しているんだわ。憎しみは愛と。苦しみは喜びと。何もかもが、夜の空気の中で手を握るの。人殺しは、暗がりのなかでは、自分の殺した女に親しみを感ずる筈はずだわ。(笑う) 何よ、そんなにあたくしをじっと見たりして。あたくしがあんまりおばあさんになったんで、おどろいていらっしやるのね。

あなたはもう僕に一生会わないと誓った筈だ。

そのときあなたは、あたくしのその誓いを言んでいらした。そうして葵さんと結婚なすった。(すさまじく葵の寝姿を見返って) このひよわな、病氣ばかりしている女と！ (茫然と) それ以来、あたくしは毎晩眠れなくなりましたの。眠っていても、眠ってい